

## 審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2950 号	氏名	城野 智毅
審査担当者	主査	安部 篤思	(印)
	副主査	奥田 康司	(印)
	副主査	折本 由人	(印)
主論文題目: Epirubicin is More Effective than Miriplatin in Balloon-Occluded Transcatheter Arterial Chemoembolization for Hepatocellular Carcinoma (肝細胞癌に対するバルーン閉塞下経カテーテル肝動脈化学塞栓療法におけるエピルビシンの使用はミリプラチンと比較し効果が良い)			

### 審査結果の要旨 (意見)

balloon occlusion を行い動脈血流遮断下に薬剤を注入すると、その末梢での薬剤注入の選択性が高まり、薬剤濃度を高めることができる。そのために治療効果が高まることは想定されていた。本研究において、その利点と条件が明確に示されたことには大きな意義があり、学位論文としてふさわしい内容と考えられる。特に使用する薬剤により効果が異なることを明確にした点は新規性が高い。

局所制御が高い事が治療効果を高めることに寄与するとは考えるが、肝細胞癌の特性と新たな治療法との関連も考慮した場合に本法の位置づけは未だ明確ではなく、本法の持つ利点をどのような条件であれば活用できるのかを明らかにして貰いたい。

### 論文要旨

2013年よりバルーン閉塞下 TACE(B-TACE)が可能となり、その局所治療効果に関わる因子および安全性に関して検討した。対象は2013年6月から2016年8月にB-TACEを施行した35例40結節を対象とした。治療効果は、肝癌治療直接効果判定基準に準じ、治療後1カ月以降の造影CTにて標的結節治療効果度(Treatment Effect:TE)で判定し、有害事象はCTCAE v.4.0で評価した。患者背景は、初回TACE症例は11例、2回目以降の症例が24例であった。年齢73.2歳(±6.2歳)、男性/女性:22/13、Child-Pugh Class A/B:23/12、AFP中央値は11.1ng/mL(1.7-9851)、PIVKA-IIの中央値は67mAU/mL(10-278523)、HCC stage I/II/III/:3/14/18、平均最大腫瘍径25.6(±12.9)mm、腫瘍数3個以下/4個以上:21/14であった。使用した抗瘤剤はEPI/Miriplatin:25/15であった。標的結節に対する治療効果は、TE4/TE3/TE2/TE1:21/6/10/3でTE4の割合は52.5%、局所奏効率は67.5%であった。全症例の生存期間中央値は27.8ヶ月、局所無再発期間中央値は7.5ヶ月であった。多変量解析による局所無再発期間の予後良好因子は、TE4になることであった。TE4症例は無再発期間中央値に到達しておらず、1年/2年/3年局所無再発率は74.5%、68.7%、68.7%でTE4となると局所無再発率が良好であった。多変量解析によるTE4予測因子はEpirubicinを用いる事、AFPが200ng/ml以上であること、初回TACEである事であった。B-TACEはTE4が得られると長期の局所無再発が得られる事が特徴と考えられ、初回TACEの際にEpirubicinを用いて行うことでTE4を達成できる可能性が高い事が示唆された。